森林と人を活かす知恵 75

地方で生活する意味を考える人づくり

岐阜県立森林文化アカデミー　副学長●川尻 秀樹

〝森林と人を活かす知恵〟、言葉で書くのは簡単ですが、それほど容易いことでないことは、ご存じのとおりです。

地方で〝森と人を活かす〟ために生活するには、まず自分の住む地域に愛着を持ち、その地域への想いを具現化できるよう働きかけられることが重要です。そうした将来ある人材にヒントを提供し、輩出することが、森林文化アカデミーの役割だと感じています。

ここで2人の卒業生を簡単に紹介すると、1人は愛知県出身で森林文化アカデミーを卒業後、自然と文化に魅せられ郡上八幡に移住した諸橋有斗さん。

彼は郡上に400年以上続く「郡上踊り」で使われる下駄が、郡上で作られていないことを知り、調査する中で一足の下駄の価格の8割が県外に流出する現実に愕然とします。そこで森林文化アカデミー在学中に、郡上八幡で郡上産材による下駄生産を探り、卒業後の2014年に郡上の下駄文化を発信するブランド『郡上木履』を立ち上げ、店舗と工房を運営しています。郡上八幡に愛着を持つ彼は、郡上産の木材にこだわって下駄を作り、地域の素材を地域で活かし、地域を盛り上げるために日夜努力しています。

諸橋 有斗さん

もう1人は群馬県出身で森林文化アカデミーを卒業後、「わらび粉職人」を目指して飛騨市神岡町山之村に住み、地域で請われる仕事をこなしながら、わらび畑管理とわらび粉生産に挑む前原融さんです。彼は大学時代を過ごした山梨県で、大好きな「わらび餅」の多くが、わらび粉でできていないことを知り、いったん就職した後にわらび粉の生産を夢見て森林文化アカデミーに入学しました。森林文化アカデミー在学中に岐阜県内で地元の方々の協力の下、試行錯誤しながらわらび粉とわらび餅を研究し、その拠点を限界集落である山之村地区に定めたのです。

彼は単に自分のやりたいことだけで地域で生活するのではなく、わらび粉生産の傍ら、高冷地野菜の収穫手伝い、牧場での牛の餌やりや搾乳、冬季には幹線道路の除雪作業車を運転し、狩猟や有害駆除された野生動物の搬送、老人宅の雪下ろしなど、地域で必要とされる仕事を何でも引き受ける限界集落の縁の下の力持ち的な存在となっています。

前原 融さん

この2人はともに、『吾唯足知』の境地で生活をしています。京都龍安寺の庭の蹲にも記された『吾唯足知』は、「常に足りている心の豊かさがあれば充分で、物質的な充足を求めない」ことを指し、逆に「足りている」ことを知らない人は、物質的な満足を追い求める欲望に際限なくとらわれる人とも言えるのです。

都会のように様々満たされた生活の中ではなく、できる限り無駄を削ぎ落とし何も無いような地方で、地域のため、他人のために、自分自身を活かす知恵を見出せる人だけが〝森林と人を活かす〟ことに近づけると感じるのです。

●詳しい内容を知りたい方は　TEL (0575) 35-2525　県立森林文化アカデミー まで